KWASSUI
Chapelmate
KWASSUI WOMEN'S UNIVERSITY
2021　春季号　№159
活水女子大学宗教委員会

―2020 年度　卒業式より―

魂譲り（譲り手）

今日、私たちは活水女子大学での学びを終え、それぞれに与えられた新たな道を歩もうとしています。これまでの学生生活を振り返ると、様々な人、言葉、経験、自分との出会いがあり、その全てに豊かな学びがありました。時には壁にぶつかることもありましたが、いつもその「出会い」が私たちの支えとなり、試練を乗り越えさせてくれました。そして今日、ここに私たち 270 名の卒業生は喜びと祝福の心と共に、集まることができました。

活水学院は今から１４２年前、愛と奉仕を建学の精神として掲げ、「この学院に連なるすべての者が、いつまでも渇くことない活ける水を豊かに汲み取り、永遠の命をえるように」との祈りを込め、エリザベス・ラッセル先生が創立されました。この手桶には、その思いが満ち溢れており、ここに結ばれてきたリボンの一本一本には、先輩方の祈りが込められ、活水の伝統として今もなお受け継がれております。

今回私は、卒業生を代表して、「白」と「紺碧色」のリボンを新たに結び加え、在学生の皆様にお譲りします。白色のリボンには、「まっさらなキャンバスのように、様々なものを受け止めながら柔軟に学んでほしい」との願いを、紺碧色のリボンには「真夏の日差しのように、強い意志を持って光の方へ進んでもらいたい」との願いを込め、お譲りいたします。

在学生の皆様、どうかこのリボンに込められた思いを心に留め、「活ける水を汲み取るもの」となってください。皆様の歩みの支えとなるよう、新約聖書フィリピの信徒への手紙 1 章 9-10 節をお贈りいたします。「私はこう祈ります。知る力と見抜く力とを身につけて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。」

この日まで私たちの学びを支えてくださった教職員の皆様、励まし合いながら共に歩んできた友人たち、また活水へ通わせてくれた家族、そしていつも共にいて導いてくださった神様に感謝いたします。
最後に、活水学院の上に、神様の豊かな祝福とお恵みがこれからも限りなくありますよう心よりお祈り申し上げます。

高濱　宥樹（音楽学部音楽学科　卒業生）

魂譲り（受け手）

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいま、これまで多くの先輩方より受け継がれてまいりましたこの手桶をお譲り頂きました。
今年は新たに、「まっさらなキャンバスのように、様々なものを受け止めながら柔軟に学んでほしい」との願いを「白のリボン」に、「真夏の空のように、強い意志を持って光の方へ進んでほしい」との願いを「紺碧色」のリボンに託し、結び加えて頂きました。

わたくしたち在学生は、この２本のリボンに込められた思いを心に刻み、「永遠に渇くことのない、活ける水」をくみ続ける活水の学生として、歩んでまいりたいと思います。

卒業生の皆様は、この学び舎で、神様からの限りない愛を受け、先生方やご家族の祈りに支えられながら、励まし合いながら歩んできた友人と共に様々な体験や学びを通して大きく成長され、今日、晴れの日を迎えられました。これからは、それぞれの道を歩んでいかれますが、喜びや感謝の時ばかりではなく、忍耐が試されるときや、困難を覚え全てを投げ出したくなることもきっとあると思います。しかしどのような時にも、いつも神様は共にいて先輩方の行く手を照らし、導いてくださいます。どうか愛と希望をもってこれからの道を歩み続けてください。

最後に、今日から始まる新たな歩みの上に、神様の豊かなお恵みと祝福がありますよう、心よりお祈り申し上げます。

全　恩恵（健康生活学部生活デザイン学科　３年）

KWASSUI
Chapelmate
KWASSUI WOMEN'S UNIVERSITY
2021　初夏号　№160
活水女子大学宗教委員会

―朝の礼拝から　1　―

“Amen”

コリントの信徒への手紙Ⅱ1章19・20節

My question to you this morning is this:　Do certain words lose their meaning over time through constant repetition, or can their meaning be preserved and even intensified?　Every week we say the Lord’s Prayer in chapel, and end with the word “Amen”.　Does this word have any significance or meaning for you, or is it simply a signal that the prayer is over?　Does it have different meanings for different people, and does even the act of saying “Amen” have special significance?

“Amen” is of Hebrew origin, and can be translated as “So be it”, or “truly”.　By saying “Amen” we are affirming the truthfulness of the words we have said, that we believe in them and that they are a certainty. We are further expressing our trust in God, and asking that what we have prayed for be so in our daily lives. The word “Amen” is really a summary of all the words spoken in a prayer, emphasizing that these words represent an important truth.

Some people may not know the meaning of “Amen” or not pay attention to its significance when saying it, regarding it only as a habit or ritual to indicate the end of a prayer.　Christians, however, see saying “Amen” as an opportunity to show their faith or demonstrate their beliefs.　Through this one word they are saying that they agree with what has been said and that it represents the way they live.　It also represents a decision on their part to act and live by these words, from this moment forward.　Rather than seeing “Amen” as the end of something, then, in this sense it is really a beginning.

When we say “Amen” we are expressing our agreement with something we consider truthful, we are affirming our beliefs, and we are promising to live each day in faith.

John　Anderson（英語学科）

―朝の礼拝から　2　―

美点を感じ取る力

コロサイの信徒への手紙第3章12節

数年前のまるで台風のような春の嵐の日、たまたま乗ったバスの中で3歳位のお子さんとお母さんの優しげな会話を耳にしました。「ママ、お花が雪みたい。きれいね」、「そうね、地面にもいっぱいお花が咲いてきれいねえ」。窓の外では、昨日まで艶やかに咲き誇っていた桜が、暴風で吹き上げられては暴雨で地面に打ちつけられており、私には「桜がきれいなのは咲いている時だけ」と不快な思いがこみ上げている時でした。同じ光景を見て、親子さんは優しい気持ちで美点を見い出し、私は意地悪く欠点だけを見ていることに気づかされ、物事を良い面から捉える力と習慣を養おうと反省した桜の思い出です。

今、私たちは、コロナの脅威の中で健康や経済への深刻な不安や日常生活の不自由さに向き合わなければならない状況の中にいます。心身が疲弊し、心に余裕があれば許せることに引っかかりを感じたり、誤った情報から他人を責める行動に出たりと、人としての弱さと利己的な傾きを思い知らされることもしばしばあります。

不都合な現実に直面しているこのような時こそ、「私はいつもあなたを愛していますよ。あたたかい心で物事を捉え、心豊かに生きなさい」と神様が語りかけてくださっていることを強く意識し、物事の欠点ではなく美点を感じ取る力を養うことが大事ではないでしょうか。あの時の親子さんの会話は本当に穏やかでした。暴風雨の最中、バスの中には安らぎを運ぶ光風が吹きました。

思いやりの心をもって物事を捉え、それをあたたかい言葉で表現すること…、とても素敵なことだと思います。「愛と慈しみのあるところに神はおられる言葉」を心に刻んで心しなやかに日々過ごしたいと願います。

橋本　祐子（就職課）

KWASSUI
Chapelmate
KWASSUI WOMEN'S UNIVERSITY
2021　秋季号　№161
活水女子大学宗教委員会

―朝の礼拝から　1　―

Run in such a way as to get the prize

コリントの信徒への手紙Ⅰ　9章24～26節

In this letter to the Corinthians, Paul uses a sporting analogy of how to run a race to give a spiritual lesson about how to live a Christian life. It reminded me of Eric Liddell, the Christian athlete whose story was told in the movie Chariots of Fire. Liddell was born in China, where his Scottish parents were missionaries. As a student at Edinburgh University he became known as the fastest man in Scotland.
In the movie, Liddell tells his sister that when he runs he feels divinely inspired, and not to run would dishonor God, saying "I believe that God made me for a purpose. But he also made me fast, and when I run I feel his pleasure."

Liddell was selected to run the 100-meters for Great Britain at the Paris Olympics in 1924, but refused to run as the qualifying race was to be held on Sunday, the "Lord's Day", a day meant for worship and rest. Instead he decided to run in the 400-meters on a different day. Many people thought he couldn't win the longer race against athletes who had been preparing for much longer, but Liddell won the race in an Olympic and world-breaking record time.

Liddell gave up a sporting career to return to China as a missionary, where he died in 1945. When asked if he regretted giving up the fame and glory of athletics he replied "I'm glad I'm at the work I'm engaged in now. A fellow's life counts for far more at this than the other." He certainly ran in the way to get the prize and earned the crown that lasts forever.

政次　カレン（子ども学科）

―朝の礼拝から　2　―

朝食で始まる一日

ヨハネによる福音書21章1～14節

私は食事の時間が大好きです。誰かとともに食事をすることは幸せなことだと感じます。家で、学校で、飲食店で、家族や友達と、自分の好きな物を食べながらいろいろな話をします。一緒に食事をしながら話した内容はより鮮明に記憶に残るような気がします。個人的には、誰かと親しくなるためには一緒に食事をするのが一番いい方法だと思います。私は教会で他の教会員の方々と食卓を共にする時間が好きです。キリスト教についてだけでなく、知らないことをたくさん教えていただきました。

本日お読みした聖書箇所は、私が好きなお話の一つです。一晩中何も取ることができず、空腹で疲れ切っている弟子たちの前に現れたイエス様は彼らに大漁を導きました。さらにイエス様直々に炭火を起こして、魚をのせて、パンを用意しています。その姿を想像してみると、とても珍しく、貴重な瞬間だっただろうと思います。そして、私はイエス様が用意してくださった朝食を食べてみたいと思いました。

ある言語学の授業で、朝食という意味の breakfast は fast 断食　を break 破るという語源だと教えてもらいました。前日に夕食を食べ、断食を経てそれを破り一日を始める最初の食事が朝食、breakfast となります。私は大学生になり、朝食をきちんと食べることが少なくなりました。というのも、高校生の時と違い、朝から服を決めてメイクをして教会に行くからです。それらで精一杯になり、朝食をつい抜いてしまいます。断食状態を続けてしまい、忙しい朝で一日を始めることになるのでよく反省します。

一日の中で心を落ち着かせて神様と対話するのに、朝の食事の時間は最適だと思います。その日自分がやるべきことや一日がどんな日であってほしいかゆっくり考えることができます。私たちは食べる前に、食事を用意してくれた人、材料、食事にありつけることに対していただきますと感謝をします。その一言だけでも、神様と対話していると思います。当たり前に食事をするのではなく、神様が導いて下さったことを覚え毎日の糧にしていきたいと思います。

佐々木　美優（英語学科２年）

KWASSUI
Chapelmate
KWASSUI WOMEN'S UNIVERSITY
2021　クリスマス号　№162
活水女子大学宗教委員会

―朝の礼拝から　1　―

イエスの軛を負う

マタイによる福音書 11 章 28～29 節

「疲れた者、重荷を負うものは、誰でも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」これは教会の入り口にある掲示板でよく見かける聖句です。ここで言う「疲れた者」とは肉体的に疲れた人ではなく、善人になろうと必死に努力するが、結局善人にはなれず、精神的に疲れてしまった人たちのことを指すと言われています。当時の律法学者やファリサイ派の人たちには、生活のあらゆる行動を規則でがんじがらめに縛られており、それらを守らなければ天国に行けないと信じられていました。そんな疲れたユダヤ人たちに対して、イエスは「私の軛を負い、わたしに学びなさい」と呼びかけます。イエスはさらに「私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである」とおっしゃっています。負いやすいとは体に合ったという意味で、イエスは我々一人一人にあった軛を作ってくださり、サイズが合わずに首がすりむけたりすることのないよう最大限の配慮をしてくださるとおっしゃっています。「私の荷は軽い」とは、軛自体が軽くて運びやすいという意味ではなく、イエス自身が私たちと一緒になってその軛を背負ってくださるから、そのイエスを受け入れれば結果的に、軛は軽くなるという意味だそうです。イエスが生きていた時代に限らず、この世はどんな時でも背負いきれない程の重荷がそこら中に満ち溢れています。

先週、島原に旅行に行ってまいりました。旅行中、有馬キリシタン遺産記念会館に立ち寄り、その時初めて、弾圧の中で、棄教した多くの転びキリシタンが後に立ち帰ったことを知らされました。記念会館内には原城に立て籠もる一揆軍から幕府軍に向けて放たれた弓の中に入っていた一通の手紙が公開されていました。手紙の中では、重税に苦しむ農民たちが、現世に絶望し、貧しいものに施しをするキリスト教に希望を見出したことが書かれていました。当時原城に立てこもった人たちの生活があまりにひどく、命を危険にさらしてまでも、イエスの軛を負いたいという思いが伝わってきました。神の大いなる恵に感謝したいと思います。

狩野　暁洋（英語学科）

―朝の礼拝から　2　―

A Christmas Abroad

テモテへの手紙Ⅱ4 章 7 節

When I was a student, I studied Russian, and in England, if you study a foreign language, you usually have to spend a year at a university in the country where the language is spoken. Consequently, one very cold Christmas I found myself in Moscow in, what was then, the Soviet Union. At that time, under Communism, Christianity was not encouraged and Russians couldn't celebrate Christmas in the same way as they can today. However, the Russian Orthodox Church was allowed to function to a limited degree, and I was able to attend a Russian Orthodox Christmas service in Moscow.

Orthodox churches are different to the churches that I grew up with in England. They are lit with candles and are beautifully decorated with gold and many paintings. There is incense in the air and the atmosphere is very intense. Also, the Orthodox priests wear very elaborate clothes and, with their long beards, look extremely grand and imposing. When the service was over, I was surprised by an old couple who invited me to their apartment to have lunch with them saying, "It's Christmas."

Their apartment was very small and it was obvious that they were just ordinary people living on a pension from the State. However, they were extremely generous and gave me plenty of food and drink. We talked about many things and I had a very enjoyable time.

I will always remember the old couple I met in Moscow many years ago. They did not know me, but still they had the generosity and kindness to share their food and time with me. I learnt from them that Christmas is not simply about having a great time with family and friends, but rather it is about sharing with and giving to everyone.

Andrew Gorringe（英語学科）

KWASSUI
Chapelmate
KWASSUI WOMEN'S UNIVERSITY
2021　冬季号　№163
活水女子大学宗教委員会

―朝の礼拝から　1　―

「スポーツ選手から学ぶ」

フィリピの信徒への手紙　2章6節～8節

五輪スピードスケートの金メダリストの小平奈緒選手はご存知でしょうか。小平選手はとても心に残る言葉を語ります「自分は何者なのかを証明するために戦う」と先日話をしていました。以前に授業の課題で「自分は何者か」という課題を出したことがあります。しかし何を書いたら良いかわからないという学生が多く、喜怒哀楽を感じた「その経験であなたはどのような気持ちになりましたか」「なぜですか」「悲しくなったのはどうしてですか」などを質問しさらに内省を掘り下げていきました。その気持ちの変化、理由や原因に対する自分の心に焦点を向ける質問を続けました。

「自分自身のことを話す」ことがイコール自分の経験だと思っていた学生が、「自分とは何者なのか」を考えるスタート地点に至ったことは喜ばしい成果でした。学生の多くがこれまで自分自身を語る、自分を知るきっかけ、それを探るチャンスがなかったのかもしれません。

学生にとっての聖書の難しさは、同じところにあると感じます。パウロは人と同じように僕（しもべ）となってイエスは来られたと説明しています。若い人々が「人間、つまり自分自身をどのように考えているか」と言う前提なしには人間＝僕のイエス像はスルーしてしまいます。これがパウロの手紙で書かれている核心がわかるか否かの大きな境目となるでしょう。

多くのスポーツ選手は、競技が自分を写す鏡だと見ています。それは弱さの理解からの挑戦です。そして日々問いかける姿勢です。一方信仰者の危険も同じところに潜んでいます。「人間は罪人」をお題目として固定的に人間理解をしてしまうことです。そこには救いの喜びはありません。問い続け、罪人としての心からの悔い改めの信仰、それが活きた信仰となります。パウロが語る「誇るべきこと」は、この罪人としての恵みであり、人が活かされる福音です。

湯口　隆司（院長・学長）

―朝の礼拝から　2　―

「試練の意図を読む」

コリントの信徒への手紙Ⅰ10章13節

コロナ第6波の中、私の曾祖母が家族にかけてくれた言葉があり、それを紹介します。

「神様は人間に、言葉で愛を表現できるように口をプレゼントしてくださいました。しかし人間はその口で悪口を言い、他人を裁こうとします。だから神様はマスクでその口を塞がれました。

神様は人間に親指をプレゼントしてくださいました。親指の指先だけを自由に動かすことのできる筋肉は、霊長類の中で人間だけに備わっています。だから人間は物をつかむことができ、何でも作ることができます。しかし、その祝福を人間は良いことに使わず、その手を使って悪いことばかりを行います。だから神様は、消毒をしなければならないようにされました。

神は一番近い人を愛しなさいといつも教えてくださいました。しかし人間は一番近い人の文句ばかりを言います。だから神様は、人と人が距離を置かなければならないようにされました。

人間は小さなことにもすぐに怒り、頭にくると言います。だから神様は人間に、熱を測らせるようにされました」

このコロナにはそういうメッセージが含まれているのではないかと、曾祖母は言いました。そして、「だから私たちは神様に祈るとき、助けてくださいというのではなく、ごめんなさいと祈るべきだろう。神様はそれを待っていらっしゃるのではないか」と教えてくれました。

私がこの話を聞いたときは、まさに目から鱗でした。私たちは多くの試練を人生で与えられ、もう耐えきれないと涙を流してしまうこともあります。しかし、そういう時こそ「神様は今、私に何を伝えようとしているのか」と物事を見つめなおすことがとても大切なのでしょう。だから人間は悩みを人に相談し合わせ、気づかせ合わせるのです。コロナがいつ終わるのか、いつ日常に戻れるのか、それは神様だけがご存じです。これからも自分自身と向き合いながら、日々悔い改めながら過ごしていこうと思います。

今田　涼加（音楽学科　1年）